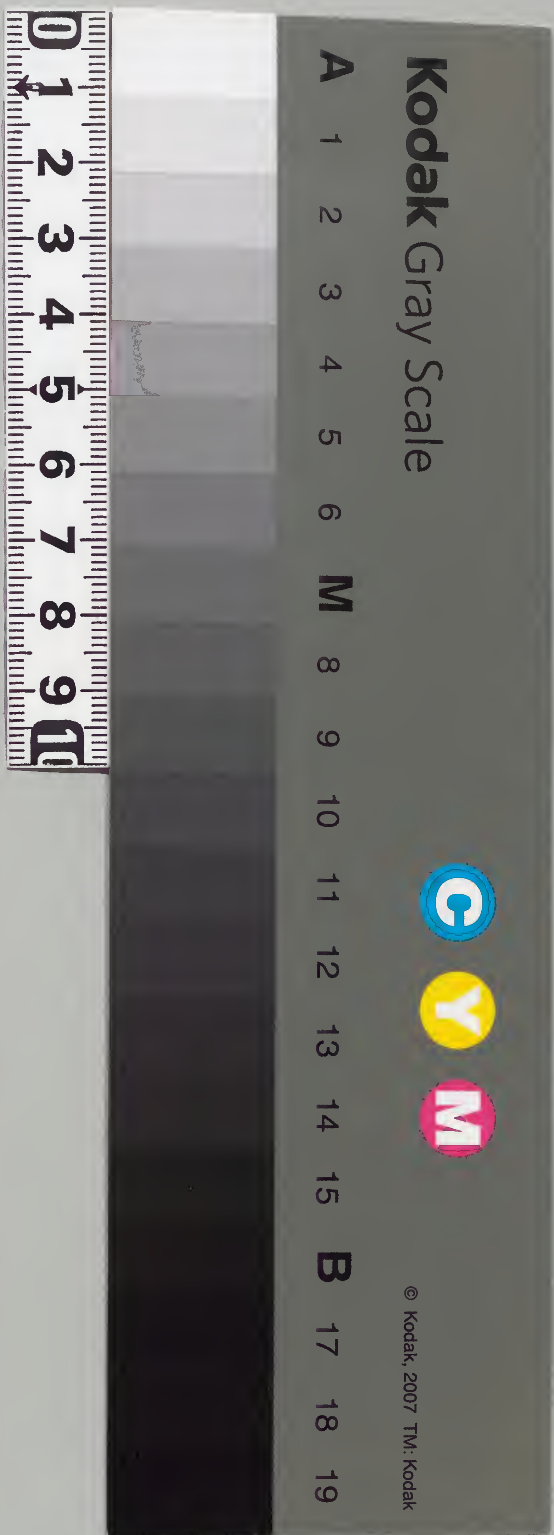


武家名目抄 職名部九

第十九冊

庫文閣内		和書
一五三函	三六〇九一	
二四一	六〇	
内閣文庫		
番號	和	36091
冊數	60 (19)	
函號	153	276

共六十

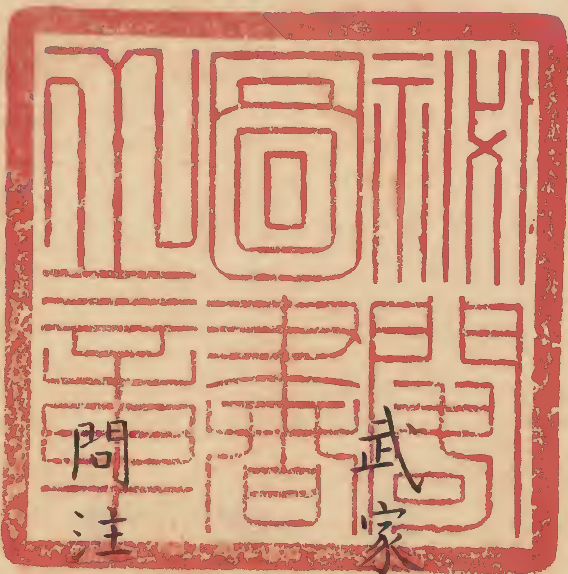


3
276

問注所執事

問注所寄人
又稱問注所衆

問注所執事代



武家名目抄第十九冊
職名部九

問注所執事



吾妻鏡云元曆元年十月廿日乙亥諸人訴
論對決_一夏相_一具俊兼盛時等_一召決之且令注
其詞可申沙汰之由被仰_一大夫入道善信仍
就御亭東面廂二介間為其所号_一問注所打
額

又云建久二年正月十五日甲子云々問注
所執事中宮大夫屬三善康信法師法名善信
又云正治元年四月一日壬戌被建問注所
於墾外以大夫屬入道善信為執事今日始
有其沙汰是故將軍賴朝御時營中就一所被召
決訴論人之間諸人群集成鼓騷現無禮之
條頗為狼藉之基於他所可行此儀欵之由
内々有評議之處熊谷與久下境相論事對

決之日直實於西侍除髮髮之後永被停止
御所中之儀以善信家為其所今又被新造
別郭

又云元久元年五月十日壬申伊勢平氏等
追討賞事有其沙汰廣元朝臣問注所入道

等奉行之

按廣元々々當時
改所別高あり

又云承久三年八月六日丁巳大夫屬入道
善信老病危急露命不知且暮仍辭退問注

所執事之間以男民部大夫康俊補其替

關東評定傳云嘉祿元年乙酉評定衆民部町野

大夫三善康俊問注所民部二階堂大夫藤原行盛

政所執事

吾妻鏡云曆仁元年六月十日癸丑加賀前

司康俊依所勞危急辭申問注所執事之間

以子息民部大夫康持可為其替之旨被仰

下

又云寬元二年二月十五日壬戌御沙汰間

詮勾勘錄事大事二箇月中事者一箇月小

事廿日此日數可令勘進之由可相觸之旨

被仰含于問注所執事加賀民部大夫七月

十日己酉諸人訴論事兩方證文分明之時

者雖不遂對決可有成敗之由被仰問注所

四年六月七日甲午前佐渡守基綱前太宰

少貳為佐上總權介秀胤前加賀守康持等

有事被除評定衆康持被止問注所執事八月一日丁亥太田民部大夫康連為問注所執事加賀前司康持替也

新式目云故武藏入道沙汰之時有法成敗事實元二廿八條之評定事書内訴人不足之由之押書去紙之遂同江中雖有書下今文不及石決之旨遍可お觸在何人等之由之被下問注所歟按物の押書とは備物乃返淋延滞せし時を代々しくおすり無物の始末を記し之を云ふ

吾妻鏡云建長二年四月二十九日甲子雜人訴訟事諸國者可帶在所地頭舉狀鎌倉中者就地主吹舉可申子細無其儀者不可用直訴之由今日被仰遣問注所政所是為被禁直訴之族也三年九月十七日戊戌出舉利錢之事所領於入流者被下御教書之由其外相論者可有一向問注所之沙汰之由被定

新式目云問注雖誤軍事右於遠國者被下石
文其後多故至于五月十日百云不系決志就訴人中
狀下有之沙汰至迫必志石文日限下有沙汰也
次友方系對之後進避問注定過二个月百云
雖不遂之節並下有以成敗也去依信不知如件
建長七年辰十二月廿九日相換与陸奥也

關東評定傳云康元元年丙辰評定衆民部

大夫三善康連

問注所執事十月日卒中引
宮大夫屬康信法師男

付衆民部大夫三善康宗

九月卅日為弘長

二年壬戌評定衆民部大夫三善康宗

問注所執

事三月依中風薨居太田
民部大夫康連法師男

太田七郎三善康

有六月五日初參去三月廿八日為問
注所執事同七月任勘解由判官

吾妻鏡云文永三年三月六日己亥諸人訴

論事被止引付沙汰問注所召整訴陳狀可

勘申是非也前々被記申詞之間為被賦九

人評定衆所被結番也御評定日々奏事結

沙汰矣 按引舟舟を引人として改所
同江下乃舟人を引舟なり

中原氏系圖云師貞大外記鎌倉評定衆貞

永式目連署男師連少外記關東評定衆男

親致攝津守從五下右將監叙留改藤氏關

東評定衆問注所 按親致を評定衆
攝津氏の祖なり

北條記云道嚴 攝津入道
俗名親致 弘安元年二月加

評定衆八年十二月廿七日補之永仁三年

為官途奉行

新式目云諸人訴沼同状事 正應之九
十九評 訴状

為非播去不可賦之中可被沼同沼訴凡即

時可成御教書之旨可被訴五方引舟事以

人歟 按訴沼同状を訴人ある時同江所の賦事
引舟り訴状を引舟の方不賦し引舟既人

より書書と訴人ありある編人として區管致き
志むる書書の事なり但訴沼の旨趣及理ふかふを
との同状とあるを引舟り沙汰不及を
さす乃西教書を訴人ふたまたと成りとなす

北條記云時連永仁元年十月十九日還補

同四年為寺社奉行同六年十二月廿八日

任信濃守同日叙爵正安元年為京下執筆
同二年為引付、番頭人正中三年三月出
家法名道太

又云元應元年五月五日取六波羅施行六
箇國以孔子被定政所分 三川伊 問注所 尾
勢志摩 張

美濃
加賀

天文本太平記云 奉流宮 同二年正月十日

東使問注所信濃入道道太上洛シテ去年

笠置城没落ノ刻ニ被召取給人々之國々
配所ノ事定而一宮中務卿親王者土佐ノ

畑へ奉流 按道右々二階堂氏あり以上
廿三條ハ德倉殿乃有司あり

庭訓性未云讓狀謀實越境相端未分甲乙

之次第譜代古傳之重書寫志於引付方マテ

遂清沙汰頭人上流圖閣右等奉行人等為

終日涉評定雖有窮屈文無以休息ハ勅判

就問注所賦 圖閣重 執筆書与問狀奉書於

訴人之時及友度無若信使節之下召符就
遠宵散状志直之下知于訴人令石進之
又云問注所志永代治春安堵年紀放春奴
婢雜人券契和共状員累沈文等謀實弘明
之管領寄人右等事以人等評判也事以人
得差并方与棄苗系仁志成書下下國之時
下奉書而无音之時志之下使者召文調訴
陳状お對苗所執事并管領事以人等致問

答披露沙治就探頭之異見所加下知也

太平記云 隆資卿自八 將軍ハ些モ不驚給
幡被寄條

鎮守ノ御寶前ニ看經シテ才ハシケル其

前ニ問注所ノ信濃入道道太ト土岐伯耆

入道存孝ト二人俱シテ候ケル 按道太ハ後
倉の世既リ

同注所執事トモ然リ是利家ノ幼ク又
同職ト卷用セシトハ才ト用ヒラレトナシ

鎌倉大日記云康永壬午問注所隼人正顯

行 按顯ハ二階堂氏ナリ此人ト
道太の代ニ補タレトアリ

建武式目追加之一文書紛失事訛訟事和貞

二因九廿七評定 可為內訖方不勢之中先日雖有之

沙法於建武三年以前分志事書之百委細

之旨趣各播弘明欵任先例尋同當知行之

實否於有訖人等志須成賜紛失安堵法个

文至同年以來分志守舊規於事書在訛恩賞

方安堵方同訖不 可有其沙法焉次不知行地事於內

訖方且相尋當時之領之弘明訖跡可是非

子細同前

御評定著座次第云貞和五年正月六日御

座武藏守師直上杉彈正少弼朝定長井大

膳大夫廣秀佐渡判官入道道譽二階堂三

河入道行誣二階堂信濃入道行珍宇都宮

遠江入道蓮智問注所美作守顯行文和三

年五月廿日寶篋院殿御自筆御記云評定

始又三方內談始也今日評定當參石橋左

衛門入道心勝仁木左京大夫頼章朝臣佐
渡判官入道道譽土岐大膳大夫頼康二階
堂大藏少輔政元問注所美作守顯行延文
三年十二月三日御座西北座管領清氏朝
臣佐渡判官入道道譽宇津宮三河入道道
眼山城判官行元南座土岐大膳大夫入道
善忠攝津將監能直町野遠江守信方御硯
役町野遠江權守

按信方ハ之管姓の人々同江不執
事なり故小出硯及と勸仕とあり

此後二十年くくりのるる信方執事次第せしこと
意安の氏を以て法脚とを以て評定始書の時に硯及
とく同姓信意と

御評定考卷終

元之永和四年正月十一日御座南光録京極

中書二階堂佐禪北管領武州洒掃刑部長康問注

所御硯刑部少輔至德二年十二月十二日

御恩沙汰御座管領義將朝臣二階堂中書

禪行照問注所刑部少輔長康波肥通郷松

丹貞秀飯濃入按同十七日仁政沙汰
の時若彦乞小同明德四年

衛門入道心勝仁木左京大夫頼章朝臣佐
渡判官入道道譽土岐大膳大夫頼康二階
堂大藏少輔政元問注所美作守顯行延文
三年十二月三日御座西北座管領清氏朝
臣佐渡判官入道道譽宇津宮三河入道道
眼山城判官行元南座土岐大膳大夫入道
善忠攝津將監能直町野遠江守信方御硯
役町野遠江權守

按信方ハ之百姓の人々同江不執
事あり故小出硯及と勸仕きあり

永徳二年

此後二十年くりのるる信方執事次第せしこと
意安の氏を以て法脚とを以て評定始等の時出硯及
とく同姓信意と
代々く勸仕せり

又云永和四年正月十一日御座南光録京極

中書二階堂佐禪北管領武州洒掃刑部長康問注

所御硯刑部少輔至徳二年十二月十二日

御恩沙汰御座管領義將朝臣二階堂中書

禪行照問注所刑部少輔長康波肥通郷松

丹貞秀飯濃入按同十七日に改出沙汰
の時若座是不同明德四年

六月廿六日職始御座管領左金吾義將朝
臣攝津掃部頭能秀問注所越後守長康波
多野肥後守通鄉御硯問注所應永七年十
二月十九日御判始評定御座管領德元問
注所信濃守長康波多野肥後入道飯尾肥
前入道飯尾美濃入道御硯問注所

康富記云嘉吉二年八月廿二日庚戌畠山
左衛門督入道管領職之出仕始也諸奉行

直垂大口也問注所町野子為重服之間問
注所子又有御免令出仕之上者可為問注
所歟之由伺申候處町野為重服不可然也
元問注所子太田雖有出仕其父違上意為
野心之者其子於御前可從所役之條不穩
便歟次攝津掃部子頭為問注所代可從所
役之由管領被申候間今日攝津子中務大
致其代云々輔之親

又云文安六年四月廿九日癸卯被行吉書
儀管領著殿上被行之頭人波多野二階堂
問注所野町攝津掃部等也

惠林院殿將軍宣下記云延德二年七月五
日丙辰將軍宣下事終云々次御判始御座
南南總奉行攝津掃部頭政親自兼日被評定
仰付了

衆役者出仕波多野因幡前司通直朝臣町

野加賀守敏康問注所飯尾肥前入道永元御硯役

松田對馬前司數秀飯尾加賀前司清房攝

津掃部頭政親今度評定奉行事先祖令勤

波多野町野之處支證紛失之由波多野被
申之但為次座勤仕例町野注進仍以彼例
被仰付洒掃云々
代々勤仕勿論也

光源院殿御元服記云天文十五歲十二月

廿日征夷大將軍從四位下禁色昇殿宣下

有之同日御評定始御判始等有之新將軍

出御著座人數定賴朝臣二階堂中務大輔

有泰朝臣町野左近大夫將監康定松田丹

後守晴秀攝津元造朝臣也康定御硯目錄持參

御前シテ置歸座三色御合點有テ又康定

座ヲ立テ二色取テ退又著座

細川家書札抄云一紛失方同注一改所方

伊勢一所帶方管領涉成敗也○按右平記以下十條之京於將軍家乃有司也

空華日用工夫集云應安三年六月十日問

注所刑部來話且問嘉遯貞吉之意余以時

節恩縁天分定數而答之按刑部とハ同注所太田刑部少輔とあり

又云永和二年三月十七日冒雨赴管領宅

和會問注所作州出家事而後謁府君而白

作州可留否事君乃領之遂乘馬蓑笠冒泥

雨就瀨崎宿屋作州聞余發慮衝泥雨之勞

已飯鎌倉余乃轉路自洲崎而飯徑到報恩

問注所刑部隨後而來謝余謂人曰拙者自

少不事俗縁且怯乘馬今冒泥乘馬赴半日

程者則何也凡人所貴者義也余与作州先
公有香火之舊今刑部不出而作州遁世矣
當此時也豈可拘出處乎
按作州と云右田刑部
の又茶同注不負作書
を以
たり

頼印僧正繪詞云三寶院流ハ醍醐嫡ノ
正統トシテ秘佛靈寶本尊聖教等師資相
承シテ覺雄大僧正ニ至マテ傳來相違ナ
キ處ニ元弘大亂ノ刻後醍醐天皇一統シ

給ヒシカハ關東ノ僧俗參洛セスト云事
ナシ隨而覺雄上洛之時極樂寺長老印教
上人ハ印可之弟子タルニ依テ本尊聖教
等ヲ預置ル者也覺雄附弟道快僧正彼
本尊聖教返サルヘキ由極樂寺へ申遣ス
處年序ヲ經候上ハ返スヘカラサル由返
事至徳ニ同五月廿四日武衛真言御傳受ノ次
ニ院主此事申出サル時二階堂式部大

輔入道友政ヲ奉行トシテ寺家ト問答ス
ヘキ由仰付ラルゝ間再三問答ストイヘ
共進スヘカラサル由申上剎友政奉行夕
ラハ寺家忽ニ面目ヲ失フヘキ由申ニ依
テ問注所信濃入道浄善ヲ奉行トシテ再
應問答子細同前同十月廿七日浄善寺ヘ
罷向テ申云度々御口入ヲ承引ナキ上ハ
向後寺家沙汰ヲ聞召ルヘカラス長老云

此條驚入侍ル者也イカ様寺僧ニ内談ス
ヘキ由申翌廿八日僧ヲモテ返シ申事成
ヘカラサル由申切ル間浄善披露ノ為出
仕ノ處代官ノ僧御所ヘ馳參リテ浄善ニ
申テ云度々御口入ノ上ハ彼ラヲ進スヘ
キ由ヲ申間武衛并管領悦喜此事也

按浄
善

町堂氏
なり

鎌倉年中行事云正月十一日御評定始管

領ハ大御門ノナラヒ南ノ小門ヨリ被_レ參
評定奉行政所問注所其外ノ衆中ハ皆面
ノ御門ヨリ出仕細代輿也二月八幡宮ニ
一七日御參竈社務社家奉行出仕政所問
注所御所奉行其外宿老中廻廊ニ幕打參
竈アリ七日ノ間濱ノ大鳥居ヲ有御廻七
度アリ社家奉行以下被_レ致御供四月朔日
御祝如例三島御精進夕ル間アヒ火以下

可有斟酌方ハ不被_レ致出仕御一家御一人
為御代官別テ有御精進同八日瀬戸三島
大明神臨時ノ御祭礼公方様御社參中ノ
酉ニハ本社三島へ為御代官月輪院出世
一人有參詣仍御一家ノ御代官ハ瀬戸へ
參詣有下向被_レ參ハ聽テ御精進過也其朝
管領評定奉行政所問注所御所奉行其外
衆中ヨリ御極進上當日晚景ニ御酒數十

献アリ管領評定奉行ハ不被參御代官ハ
出仕御劔御推進上又御劔被下御所奉行
其外宿老中皆々出仕有也

按以上口傳を關東
公方の有司なり

按同注訓を改訓の別廳ありとて改事を
沙汰する中も訓詁の裁刺を中務とて系
示すも同注とて彼是乃詞を推同しく其
類を注記すふしこれ等凡鎌倉殿乃時
天下の機勢悉く關東小決きさる事あり

以上も歳内と西色とて人情頗東方小あり
たれとてあらざれば制度も亦き玉法よ
習ふ事なきにあらずあり京師と法
西と小分府を設る事歳内及び關西志
法國を管領とむたす大事とむくを算
東の成敗も随ふ所と東北乃法玉とて改
所と同注所より分配しく各國の訓詁を融
断とむ

改不旨注不各内評定といふことあり
たれ等舎合し改勢を識すは世故あり

うふたう海人あれを支所の内各を執り乃
而し執く事と海人の時官に訓を以人の
内賦別を以るると其海州を以方引舟不
賦しく是を沙汰さしむ畢竟海証乃事々
尚府の事勢ありたりはとて天下に其証
悉く安んじしるる事ありとて又支府乃
分掌あるを以て同証所の主勢とする不
財貨備貸と事順地の津端又盜賊を悉く

失材せし等の証証ありとて是ら其事ハ引舟
徳さし及んば尚府乃事人等とて其
沙汰す不定格なる事
携訊決罰等の事ハ侍所乃
職掌なれとて証証引舟方
ありとて 始右大将家之旨康信茂尚訓乃
執事に補せしれしより其子孫より其の世職と
ありとて評定流の内町野太田の有家より是を
うけ給る事ありとあり
是より其人を以て其
同証所との事あり
なへく其勢の内海証の成敗と急勢とする事

故ふ高所の執事ハ改所執事トおあつてふ
を職とて只所沼の沙汰の事と改替評定の
席には除きたる事あり又吾人の進退と管
領と同一と成りて是其成敗と改替事と
とて其つとて其事とて其事とて武
家の要職とて足利殿の時とてと徳倉
の例と准りてあ家の子姪とてとて永く世職と
扱せしむ是より先孫倉殿の季世と扱津

親致二階堂時連をまゝに世職に補せしむ
等持院殿の時とて時連又は小乞と受け給
ふるに其任小場とては其任とて
定例とてあつてふなり
寶篋院殿の時二階堂顯
は同沼に執事とてあり
あるとて同例とて西世あ人のあり
之等氏ありて補任せし者あり

問注所執事代

吾妻鏡云建久五年十月一日戊午大舎人
允三善行倫可記訴論人問註詞之由被仰

出之日來父大夫属入道善信奉行職也依
他事計會舉申行倫云々按信云々
執事あり

花營三代記云應安元年正月廿八日御評

定始御座南土禪管領中禪洒掃北典膳
今禪常禪遠禪中書禪安禪御

硯町野加賀民部大夫為問注所遠禪代勤
仕之○按尚時同江所

執事町野を江歩司法方入道志禪法新々ふよ川々
今日民部大夫代官と〜硯及と勸免〜なり悉〜
くを條末乃
按中小之り

御評定著座次第云應安六年正月十二日

御座武州頼之朝臣佐礼部高秀京極攝洒掃

能直町遠禪真勝山中書禪行照佐備禪道

壽御硯町野掃部助信兼按信兼を真勝の代
と〜硯及を勸仕る

なり明年正月の評定始をま〜なり不同〜なり
畧と下引〜花營之代記永和元年同之年の評定
始ま〜の
例なり

花營三代記云永和元年正月十三日御評

定始御座洒掃能直管
領武州頼之御硯役問注所代町

野掃部大夫三年正月八日御評定始御座

佐々木大膳大夫二階堂中務少輔御硯役
管領武藏守問注所町野遠江入道
問注所代町野掃部助

御評定著座次第云應永十年正月十一日

御座管領右金吾禪徳元土岐美濃入道常

保侍波多野肥後入道元喜二階堂山城左

衛門尉飯尾肥前入道常健飯尾美濃入道

常廉御硯山城左衛門尉自去年至十五年

勤此役也○按尚
時同注所子細有く御役を勸免し
以て二階堂氏其代を勸仕せしと見ゆ

康富記云嘉吉二年八月廿二日庚戌畠山

左衛門督入道管領職之出仕始也中務攝津

掃部子頭為問注所代可從所役之由管領

被申候間今日攝津子中務致其代

按同注所執事代を為し稱し同注所代と

以て尚時執事とよむ同注所とのツキ

故なるに其職を常日必設する處を有司り

あつて執事故障の時又を不及小合期し

難き事なりと没らざるものあり建久中之旨
 康信男の倫を尊く代官とせし代を始と
 しかるは是利敵の時よりわたりて評定始以下
 けりて儀式の節小執事と没し没し難き
 故あはは代官とて白地小の事と定先らと
 一時の所没小没事せしむるなりひありされ
 此頃執事代をうけ給くる者尚所乃要務小
 執事所なく臨時の没をのし勸はき
 凡執
 事法

十九之廿二

神事とて儀式乃所没小没りてと政訓同注所
 以とも同例とて共了代官を用ひ給たりひなり
 但政訓を武家の悲振府とて公務整定不
 不々故し常日執事代を没されしなり
 尚所乃執事と古来之旨家乃世職系
 を以て代官もあはは其子姪たる事
 定先ら所なりけりて尚所乃人
 たりけり地姓の人と亦勸はせし事あり
 あはは是合くも人なきを以て儀式を闕
 履し給らる故なり

問注所寄人 又稱問注所衆

吾妻鏡云元曆元年十月廿日乙亥諸人訴
論對決事相具俊兼盛時等召決之且令注
其詞可申沙汰之由被仰大夫屬入道善信
仍就御亭東面廂二箇間為其所号問注所
按善信多高所執事乃持麴々々々
後系俊兼平盛時等々々人の始なり
又云承元四年十二月廿一日乙亥為伊賀
二郎宗光之奉中民部大夫仲業可相兼問

注所寄人之由被仰含是掃部頭親能入道
家人也依右筆藝被召仕云々
又云建曆元年正月十日甲午政所問注所
吉書始也行光善信各參行之今日橘三藏
人被加問注所衆

清原氏系圖云滿定左衛門少尉弘長三年
十一月二日卒年六十九男重定清式部大
輔問注所寄人

太田康有記云建治三年八月廿九日自山
内殿被召之間馳參之處召御前被仰之武
藏守可為一番引舟頭中略早以此旨可觸仰
彼人且同注所公人不足云々先日所舉
申之富来十郎光行山名弥太郎行依藤田
左衛門四郎以盛清武部四郎職定皆吉四
郎文盛可召加寄人云々九月六日一番引
付注文進武州五番執筆合奉行文名付城

勢當所新參寄人等與書下了

按以上五條八條
倉殿の有司あり

庭訓往來之間注所々永代沽券安堵年紀
放券奴婢雜人券契和与状員累記文等謀
實弘明之策願寄人右子幸以人等評判也

季瓊日録云長祿三年十二月九日勝定院
御佛更錢請取奉懸于御目也問註所小串
次郎右衛門尉土岐美濃守一色五郎殿上
野民部大輔殿飯尾左衛門大夫伊勢備後

入道各千匹充問註所新加之衆故獻五百

匹按此二條を是利
殿乃有司あり

按同注所寄人々執事の令と受けく同
注の事とありとるとのあり其職掌
大町と改所寄人小准一々志向屋一凡
世流の内引身成ふつる屋き事とあり
又なりゆきすすちもありたはおのら
家族の等居あれくちと謙倉殿り時

及小世事とすむく同注事ゆとす或
又同注不人ともく不古同注不元とす
意少く改不寄人を改不人といひ一
同一於同注事ゆ條と糸考す一

武家名目抄第十九冊

藤原弘貞書

十九之廿六

